

家具など木工を中心としたクラフトマン（工芸作家）の組織が注目を集めている。食品と同様、家具でも「生産者の顔が見える」製品へのニーズは多く、活躍の場が広がっている。消費者と直接

沢良一会長（45）は「吉沢指物店」（沼田市）の三代目。生活の洋風化に対応して洋間にも合う和家具を手掛ける。漆を使った仕上げが得意だ。「木工房むく」（片品村）の鎌田純男さん（54）が事務局長を務める。素材の木の形を取り入れた

大会展示も 3年高上 群馬



群馬県ウッドクラフト作家協会の吉沢良一会長と鎌田純男事務局長

波頭旗頭

工芸作家、組織で高め合い

結びついた高品質なモノづくり。大量生産・販売される量産品と一線を画す工芸品で、作家同士が互いに競い合い、レベルアップを目指す。

群馬県ウッドクラフト作家協会は一九九五年に発足した。県内十七工房の十八人が参加する。吉

旭川クラフト協議会の高橋秀寿会長（写真上）とヨシダナオト氏



が、「工芸品（商品部 村野孝直）

旭川 知名度向上へ若手集う

（旭川市）取締役の高橋秀寿さん（39）は「旭川には家具の産地として知られているが、工芸品

キャビネットやいす、テーブルなどを作る。普通なら捨ててしまう材料も使う。「曲がりも節も木が育った歴史。大切に作品に取り込みたい」というのがポリシーだ。

「たい」という消費者が着実に増えているという。展示会の来場者が増えて

「同じグループ内で刺を立ち上げた。高橋工芸

が伸びるな 房の売上高

協議会のメンバーである北嶺工匠（旭川市）は

いることに 伴い、各工

ではないか」と話す。 月、二十―三十代の若手

を「to・mo・ni」のブランドで発売した。同社で企画開発や宣伝を担当するヨシダナオトさん（30）は「旭川には家具の産地として知られているが、工芸品

は「モノづくりの質は落

とさず、より質を高めて

が旭川クラフトの強み」とい

は「モノづくりの質は落

産材を多く使っているの

ヒモも固いが、吉沢会長

会にも参加している。道

気後退で消費者の財布の

に都内での大規模な展示

さか次の作品作りのパワ

ーションした作品を中心

ともしばしば「その悔し

ち上げの狙いを話す。

仲間の作品をみて「やら

まひとつ。全国的な知名

れた。悔しい」と思うこ

度を向上させたい」と立

の強み（鎌田事務局長。

産地としての知名度はい